奥村家蔵『波多野流詠曲師傳口訣』解題・翻刻

生形貴重

はじめに

『波多野流詠曲師傳口訣』は、京都を中心に伝えられた平曲波多野流の節博士についての口伝集である。奥書には、

此一巻は今枝栄斉老中野検校より口授せられし所を記されたる也其原本は職の秘蔵本となる波多野一流の口訣をしるして実に末代の亀鑑ともなるへき者歟

文政十亥年閏六月

岸浪検校門人

藤井雪堂謹写

とあり、原本は、中野検校の口伝を今枝栄斉（栄済とも）が書きとめたもので、この書物は、それを藤井雪堂が書写したものである。また、解題にも示すように、裏表紙には「岸浪氏所蔵」と記されており、この岸浪という人物は、もちろん雪堂の師岸浪検校である。岸浪検校は、館山漸之進氏が引用している、波多野流最後の検校藤村検校の説[1]によれば、流祖波多野孝一より三代目の人である。また、後述するように、この書を所蔵する奥村氏は、藤村検校の師で、岸浪検校の三代後の検校奥村検校の孫にあたられる。この奥村家に所蔵される文書の多くは、岸並（浪）・権田・寺内等の蔵書を示す墨書があり、それらの名が波多野流代々の検校であることからも[2]、この書物が京都の検校屋敷に伝えられていたことが分かる。

さて、周知のとおり藤井雪堂は、平曲の解説書『追増平語偶談』[3]の著者である。『追増平語偶談』は、冨倉徳次郎氏の解説[4]によれば、文政十年（一八二七）夏に彼が著した『平語偶談』を、天保五年（一八三四）夏増補したものである。この『平語偶談』の成立年代から考えて、『平語偶談』が『波多野流詠曲師傳口訣』を書写した直後に著されたことが判明する。この点でもきわめて貴重な資料であるといえるのであるが、『追増平語偶談』と『波多野流詠曲師傳口訣』を比べてみると、『追増平語偶談』の中巻に当たる節博士の解説が、きわめて忠実にこの口伝から引用されていることが分かり、

明らかにこの口伝の内容が波多野流の間に永く伝承されてきたものであることが判明する。まさに雪堂自らがその著の上巻に当たる部分の末尾に、

　已以は竹葬老の説に原きて、節博士を論する也

と述べているとおりなのである。

この「竹葬老」については、『追増平語偶談』にも書かれているとおり、今枝栄斉その人である。彼は、波多野流の譜本も書写していたらしい。『追増平語偶談』には、

　一波多野流譜本十二巻（但し上下に分て二十四巻とす）　當流中興中野検校門人今枝栄斉翁親筆也　譜本今枝氏の家に傳　頗精撰之譜也

と記されている。ところで、『波多野流詠曲師傳口訣』の冒頭部にも、後に翻刻で示すように、表題の次行下部に「竹菴録（チクアンシルス）」とあり、この書物が、右のようなことから雪堂の自筆本であり、かつ波多野流平曲のみならず、平曲研究上でも貴重なものであると言えよう。

さて、この今枝栄斉と中野検校については、詳細は現在不明である。ただ、『追増平語偶談』には彼の名を記すときには「今枝栄済老・今枝栄済翁」[5]という具合に、必ず「老・翁」が付されている。この書きぶりから推すと、先の引用部の「今枝氏の家」という表記は、当時既に栄斉は没していたのではないかとも思わせる。ともあれ、雪堂が敬愛しており、彼より相当年輩であったと思われるので、十八世紀なかばごろから十九世紀初めに活躍した人であると考えられる。

中野検校についても詳かにその伝えを知りえないが、冨倉氏は、雪堂についての解説で、「（雪堂は）性温重、平曲を中野検校に学んだが」と述べておられる。ただ、中野検校は栄斉の師でもあるので、栄斉と同世代の人であることは確かである。『平家音楽史』には、

　平家詞曲曰、寛保[6]二年秋七月、桜町上皇、亦聴二河瀬意一、中野順一之所レ唱。藤村誠薫為介、當時悉其秘曲、此為二奇偶一

という、「平家詞曲」の記事が紹介されているが、寛保二年（一七四二）という年代から考えて、この中野順一と同一人物かも知れない。[7]とするならば、右の河瀬検校が波多野孝一没後波多野流の秘伝を極めた人であり、彼の死後一時波多野流がその伝えを失った時期もあったといわれている[8]ので、この河瀬検校と同一時期に活躍していた中野順一が、この中野検校であるかも知れない。また、今日波多野流の系譜は、『平家音楽史』に紹介されている「藤村性禅の説」が定説化しているが、波多野孝一から次の岸部検校の間には、少し時間的な空白があり、右の河瀬・中野検校は、その辺りに存在する人のようにも推測される。[9]そのことからも先に引用した部分にある「当流中興」の人ということは確かであろう。

以上の点からもまた、『波多野流詠曲師傳口訣』は、相当古くか

ら当道の人々の間に伝承されていた口伝であると考えられよう。

次に、この書物の内容構成について。内容は、平曲の節博士の詳細な解説の部、小秘事の譜本の部、撥譜の部の三部からなっている。この内の後の二部は、後に付けられたものと思われる。いわゆる「口訣」に当たるのは、その第一部である。本書の全容については、改めて奥村家当道資料として報告する機会を与えられているので、ここでは「口訣」の部分を翻刻し、平家物語研究や当道史・平曲研究の一資料としたい。左に解題を記し、本文を示す。

解題

所蔵者　京都市左京区烏丸丸太町下ル　奥村俊郎氏

表紙　薄茶色の地に茶色の細い横線模様。

タテ二十七・二cm

ヨコ十九・二cm

中央部にタテ十九・八cm、ヨコ八cmの白地題簽あり。

「波多野流詠曲師傳口訣」と墨書。

裏表紙　表紙と同じ地。中央下部に「岸浪氏書蔵」と墨書。

本文　三十九枚。その内「口訣」部一頁十一行書き、二十四枚。譜本部一頁七行書き、十一枚。撥譜部一頁六行書き、四枚。（但し、最終頁は奥書）

奥書　先に引用のとおり。

装幀　和綴。

保存状態　良好。

その他かなづかい等、表記は原本のまま。節博士の記号は、補注に示す。

『波多野流詠曲師傳口訣』本文

平家物語詠曲師傳口訣

竹菴録

一　口説　平家の文言事実に気象の移る事は上達の上にて自然の事なれとも其所々にて語やうは習ある事なり譬は軍物語軍士の出立勇子の言葉なとは声濶く強くして甲乙をはきと分て気の引はりつよく甲の所にてゆつたりと乙の處にてよする意味あり其体けなげなる趣なり尋常の口説は甲乙をしかと分て声を和らかにすれは甲乙に角なくして丸く聞ゆるなり凡口説は平家の礎と知へし枝折口説は意味ふかきまては演がたし大抵声の吟和らかに其根よはからず甲の所にては調子は挙れとも声は張ず風情はなはだ優美に位あるを第一とすしほりとは和らか成の至って味の出たる所にて気のはりと口中のわざ熱せられは意味深長の處は得がたからんよはき声にて語ると云事にはあらず強り吟と表裏相反して其揆は一なり恕口説は一すねすねたるが其体なり勿論ちからよはきを嫌ふ忽ちつよく忽ちよはし口中の働き第一なりこはりの事は拾の下に

詳かに論ずロ中の働き乙の力に有りと知へし

一　中音　大抵中音はゆつたりと初重中音と降中音とはさらりと語る習也山水の風景又は景色ある人の栖居なと書きつらねたる中音は声ほがらかにゆつたりと気持立のびて潤々と語るなり眺めやる気象あり哀傷感慨意味深き中音は声をしめて和らかに語る思ひ入たる意なり声を〆るとは声をほそくするにはあらす乙よりすり出す声を本として気象の延ぬ意なり中音の序破急とは大抵節の所にてはとくと行届くやうにゆつたりと節なき處にてはよする意なり

一　初重　全体さらりと語るべしはやき事には非ずねばらぬやうにとの事なりひつとり序半急を第一とす気色を演さるはさらりとして和らかなるよし意味ふかき初重は甲乙さま〳〵模様あり声をしめて枝折の意有處もあり位ある初重は一段声に根を入てはる所はゞびろに語る其意味はなはだむつかしきなり凡中音初重は初学の者もはやく入やすく又上達の上にては以の外むつかしき事なり位あ初重る別にロ受あり

一　折音　是又むつかしき声也凡哀傷感慨意味ある處に必是を用ゆ全体すり音にて乙よりはり出す甲ンならでは味なし飽まて和らかにしほりあるを肝要とす

一　峯音　色声同意なり高く挙るより言はみね声なり声の姿よりいへはいろ声也折声と調子は同じけれども其意味は大にたがへり折音はしつとりと語り出す此弐ツの声は忽然と思ひがけなく催す意あり折音よりは風景有と心得へし

一　指声　声のさすを本意とすさすとは声のうかぶ意なり居着ざるをいふ飽まで軽くうかんて和らかに根のしまりたるを肝要とす多くは折音と前後相連る折音とは風情表裏せざれは其真意を得ず返々も声のおもきを嫌ふ

一　三重　是はこれ平家の花英と謂つべし声の善悪有無による事には非ず風情拙からぬ様に有たき事なり全体声ほがらかに浮んで其根よはからず其声つよからずせは〳〵しからず譬ば大空に鶴の舞が如しと言り声ほがらかに浮ふは其風情なり其根つよきは所謂乙よりはり出す声なり声の根よければ味なく節も美しからずして小哥声のやうになればいかほと声よく挙りても平家古雅の風情を失へば論に及す譬は紙鳶登りの緒の切たるか如し其声つよけれは拙き節出ていやしくて聞もうるさしせは〳〵しけれは節全からず。本より優美の体なし

一　甲声　吟つよきは持まへ也全体すり声なる事を能々心得へしすり声ならされは甲声にならずすり声とは乙より十分につよくすり出す声にてしぶとくすねたるかたちあり言葉に述がたき所あり節はは所よりはらざる所を心得へしはる所には力ありはらさる所

にはちからゆるまる故也拾ひよりは各別ちからつよく調子も少しかると心得へし節ばかり気をはりて語りても声の出所を知されは気勢ばかりにて尼か十面つくりたがるが如し

一　拾　甲乙中當りに心を用ひ開合をわけて強りを第一とすつよく押付る様に語るを強りと心得たる大なる僻事なり口中軽く自由ならざれは強ることなりかたし乗りかゝるを嫌ふ間ぬけのするを嫌ふがく〳〵とがくつくを嫌ふもたれかかるを嫌ふ始終弓の絃を張たるが如しと言り此四の病は初心には却而無事なり余程手に入たるに有事也乗かゝるとは節も文句も能手に入声もあぶなげなく出れは調子に乗て行を言間ぬけとは是も大畧手に入て落着たがほに成過たる体也がくつくとは節も手も入声もよく出れども乙よりはり出す處のちからなく気のひつはり無れは節博士が手に入すぎてよくまはる故に一ツ〳〵はなして見れば至極全たけれども引ばりなき故に一ツ〳〵縁が切てがつ〳〵とするをいふもたれかかるとは是又節もよく手に入たる故に声も十分よく出て声つよく成て其つよき声を以て其節〳〵につよくあて無二無三につよく押付て行是をこはりと覚へたるをいふ也是等は皆初心の及ばさる所にて余程手に入たるうへの病なりしかもみな素人ずきのする事共なり抑〳〵強りと言はつよき声を出して喧しくいひちらす事には非す其ではつよき声に申付て平家を語らしむると言者也左様の義にてはなし惣てつよき物の至てつよけれはぶり〳〵としてすなほに行ぬおもむき自然と其中より生ずるもの也是をこしらへてする事にはあらすあたまかちにつよきもの其根必よはし本より声の吟はつよけれ共、声のすかたよりは其根のつよき所より自然と味の出て来るを先づこはりと言なり其強りをとくと執へおおせて語る事也其意味言語には述かたし爰に譬を以ていはん若く壮んなる人の笙を吹が如し気もつよく長くして笙の音もふとくつよし是すなはちつよき声を出して平家を語るか如し又老輩の功者なる人の笙を吹は気もつよく壮んなる事は有まじけれども其音もふとくたくましく聞へ其中にびり〳〵とびゞるもの出て来る也是を彼若き人の笙の音とくらぶれは抜群につよくしかも味有是等を以て其大略を合点すへし彼若き人は声に笙を吹せておくばかり也余ほど手に入ずんば此場までも至べからす彼老者は卒忽には吹ず末息を出ざるさきに心に味あり其味息となって出其息笙と合体する故に笙の音に味あり未声を出さぬ時に心に味あり其心を声に移す其声を口中に移すロ中受取て労することはなはだし於是て強りと言もの成就せりその強りを其節々に應じて語る事也前の四病を能々心に観じて見よ此中より味と言もの出かたし如何となれは心に力を用ゆる所の根なく覚たるに任せ声に任せておく故也夫音曲は口の事也事委しからざれは味なし気のはりつよく声の根をたくまし

うして口中を和らかにして事を働らかさねは味なし味無れはこはりは出でず学者爰に意を用へし又和らかなる吟より俄に拾に移る事あり其際はつきりと分るゝを肝要とす　或予に謂て曰足下笙の譬を以て平家の声を論ず彼若き人は未熟なり老者は上達の功者たり若き人も日夜努て怠たらずんば老者の位に至るべし平家又斯の如くならん予答て曰子が言もとより然り去ながら六藝皆其法あり法を以て階桟として努て後上達の位にも至るへし其法全たからざれは上達に至る事能ざるのみならず半途より道を失ふ是より自己の私意を出してこれをはかり其人々の得たる所にかたよつてしかも是をよしと心得て其所に一生とどまる者多し是正路を知ずして邪路に迷ふが故也正路を知んと欲せば其法を委しく学べし故に予は其法を論するのみ

一　歌　和らかに優美なるを風情とす然れとも其根はつよきを好む其声はすなほなるをよしとすかろく語りなすありおもく語りなすあり根つよけれは味ありて位あり根かろき時はかろく開ゆ根のつよきかろきは緩急の意なり気をゆるす事には非ず根とはいかに心のひっぱりと乙の力とを言たとひ声は甲たりとも乙を忘れたる甲ならは味もなく節も全たからじ若や口上手にて味あるやうなりともこしらへものにて自然の味にはあらず衆人挙つて誉ると言共誠に賢者の一諾にはしかざるべし

一　下け　かろくねはらぬやうに語るへしおもくねばきを嫌ふ然れともかるはつみにならぬやうに心得へし口説のおはり皆下けなれば爰にて此一段の収りを能心得へしおさまらされは本意を失ふ

一　強下ケ　其声こはりて其かたちかろく其風流言語に述かたし甚むつかしき声也意気込にて語る事にて声をつよくして其声に語らせておく事に非す文言長く中に浮きなと有は言葉には言尽かたし譬は勇士の甲冑をよろひ一さし舞が如しと言りつよく押付もたれかかり或はきほひをつくるなどみな其体を失ふと謂つへし口中かろくねばりなきをよしとす

一　讀物　第一甲乙を能鍛練すへし節博士の行届くやうにすへし甲乙を鍛練すとは乙の自由になる場に至る事なり上調子にて口先きにて節博士をあやどる場を遁れねはならぬ事なり臍下より声の出る處に至れは甲乙自由になりて節博士其所々に行届て後讀物成就すと心得へし此理は讀物に限るへからす音曲みな此場に至らされはなりがたけれ共讀物は平家中第一の雅曲にて声節全たからざれは其任に堪ずしかのみならす悪き僻出て後まで妨と成へし故に初学の人の取あつかふこものに非ず　抑讀物は滴々の拍子有故にややもすれは躍り拍子に成て拍子はやくなるもの也緩やかなるを好むとには非す甲乙正しく節博士の首尾完して間の抜ることなきを本意とす拍子品々なるは声節手に入ざるか致す所なり讀物

に種々の体あり祝言の風体あり勧進帳の気象あり腰越状の意気込ありそれ〳〵に語分る事は鍛煉のうへの功者なるへし

凡音曲は甲乙よく調ひ乙のちから自由ならざれは能はざる事は上郢曲より下浄瑠璃等に至迄皆斯の如し就中平家の音声はみなすり声にて語るが平家の風情なり昔時上達の人すり声ならざるはなし其声和らかなれとも声の根甚つよきか故に其風情鄭声の趣なし学者爰に意を用ば幸甚

右数条之法則は先師の口援及び昔時上達の人時々論ずる所之鎖言を集めて各部類を分て是を録すに敢て自ら任じて初学の人に授んとには非ず予本よりここに於て十か一も得る事能はず実に述て作せず古を信ずるの切なると前哲の確論むなしく湮没せんことを惜むとにあるのみ庶幾は同志の人と共にこれを論じて階梯の一助ともならばまた楽しからず乎

平家物語師傳口訣

声節講義

一　三重　中音初重は三重二重一重と合点すへし三重なとのやうなるを音曲家にかんと称すかんとは甲の事也平家に於ては三重は三重の持まへ有て其中に又かんあり中音は中音のもちまへ有て其中に又かん有其持まへ〳〵に甲あり乙あり中音は三重より律はひくけれとももちまへは甲なり初重のもちまへは乙と合点すへし都て音曲は其もちまへ甲か乙かを先最初に合点すへし初重も乙なれとも其意味なりいかんとなれは節並同事なるゆへなり中音は声つかひに大にかはれりいかんとなれは節並別なる故也故に三重初重の間へ入て様曲節面白きと知へし中音は声白しなへて甲も乙よりはり出すやうに語るへし少も声をろくにつかはす始終しなへて語るへし三重は声和らかに浮んて直につかふと心得へし中音も声こはくなるは嫌ふしなへると言は和らかにせんか為也降中音初音中音皆中音の節並声つかひなり

一　折声　色音峯音何れも三重と律は同じけれ共声白大にかはれり声のうかふを嫌ふ声裏まはりて謡なとのくり声の如くなるを嫌ふ中音と声つかひ大体同事にて乙よりすり出して声をしなへて声を直に違はず其律三段に別れて中へ落る所およそ中音の節なき所の意味にて甲の所は中音一の声の次に甲へ上る所と大体同じ声つかひ也乙よりはり出して声をしなへて甲をはり出すと合点すへし三段めの乙に落る所は初重の意味なり

一　指声　其もちまへ甲なり声白和らかにうかんてさすを第一とす甚風流の声なりと心得へし節声三段に分つ一段二段は随分かろく声をさす様にして気のひつはりばかり也おもくねばりたる甚其体

を失へり三段めの乙におつる所よりしつめて語習なり是指声の体と合点すへし

一　口説　其持まへ乙と合点すへし初重と同律なれ共初重は声をろくにして浮ぶ意味あり三重に似たり六ヶ敷初重の曲節に至りては功者ある事なれとも先其もちまへ此の如し口説は乙にして声にうきある意味有うきとは調子の浮て高くなるには非す声貝につやの有意味也初重の声のうかふと口説の声貝にうきの有とは意味合大にたがへり

一　拾　其持まへ甲なり声の吟つよきゆへに其体大にかはれり本より乙よりつよくはり出すへし上調子にかみつくやうにはるを嫌ふなり第一声あらけるゆへに鍛煉すくなけれは調子違ひやすし乙より声をすり出し心をしめて調子に心をとめて語るへし少し語馴たる人はめったに声をつよく出して其声に語らせておく輩多しいかにも口中に強りを以て其こはる所より声を出せは乙より声はり出て兀言にすくひつはり有て調子も違ふことなし口中こはるとは木か竹のやうにする事には非す口中和らかにしなへたる所よりこはり出る事也つよき声斗に語せて置人は素人耳にはつよきやうになれ共必す一ノ声又はくり上などの所になりてしなへもなく味もなく本より強りもなしいかんとなれは口中が労せぬ故也口中労せぬとはいかん口中にこはりと云ものを持ぬゆへに口中にちからなきことを云也。拾は別て声をしなへて強てゆかねは曲節の所に至て其わけがあらはるる也

一　甲音　其持まへ甲なり吟つよけれとも拾とは大きにかはれり拾はこはるのみなり此声は本より乙よりすり出すこと拾よりはちからを入て一すねすねて少し浮ひこはる也強りにうきある所がすねたる所なり律も拾よりはかると合点すへし拾より一段つよきか其体なれとも少しうき有ゆへに乙よりすり出す声が却ってよはくなりやすしよはくなるといふは彼口中の強りの功かうすき所よりしからしむると合点すへし

一　讀物　甲乙の調ひ平家の声節手に入されはとても語られぬ事也一々に其節置行届されはおどり拍子になりて拍子はやくかるはずみになる事也とく〳〵と其節々に行届く時は自然と味出るなり外の声節調子を能鍛煉して合点ゆきたるうへにて語るべし

補注①　一ノ音　其声甲なり中音拾にあり上を長く引て下を短くとむるを言すべて平家の節は調子を専とする故に長く引にはゆり引にひく事なりろくに始も終もめりかりなきやうに引なり謡なとは真直に引て終りは少しかる様に止る也平家はははしめも終もめりかりなきやうにゆら〳〵とゆり引をば平家音声の体とはする事なり拾は吟つよき故に声のゆる所則強りとなる也こはりてゆり引にする也中音は和らかにゆりて引と心得へし此一の声の次は極て甲へ

はり上る節有と心得へし一の声の次に引すての節有時は其引すての次に声をはる也引すて有は稀也次の声をはると言は一段甲へはり上て折音の調子まて上る也其所にて声の裏へ行て謡のくり地のことくくり声にならぬ様に心得へしくり声は声の裏故に声強くて和らかなる事なりかたし平家の中音はいかにも声をしなへて和らかに声の表をつかふて甲へ上る也中音の甲は大体折声の甲と同意味と心得へし一字〳〵にとく〳〵と声をしなへてあたつて行なり惣して平家には声の裏をつかふ事はなしと心得へし先此心得肝要なりあたる節はかり声裏へひぞる也ひぞりて声裏へ行をあたると云すべて平家は一字〳〵に声を取直し〳〵して語やうに節並を付たるもの也其故いかんとなれは調子を専とする故なり調子を専とするとは如何平家は本郢曲神楽等の節より出たるもの故に鄭声俗楽の類に非ず本正しきものゆへに自然と其節置正しと知へし故に爰に心を用されば上の節より下の節へうつる時声を正しく取直して一字〳〵と云が爰の事也爰に心おこたり有ば上の節の声により下の節の声或はひぞり或は音律拙くなりて其体雅音ならず彼調子を専とする本意を失ふに非すや爰に心を用ひ爰に目を付る人の稀なる事を常に歎する事にこそあんなれ凡あたる節はかりが上の節の声なるに声を改めすして自然とあたると心得へし是はあらためられぬ故にあたるといふ節が出来たるもの也先最初に此心得を忘れぬやうに学ふを肝要とす

補注② 二の音 甲なり中音にも拾にもあり上を引て下を大きふ廻すを云是も上をゆり引に引て下も同くゆり引に上より短く引て廻しおさむる也此音にいろ〳〵病癖出来るもの也上は一の音を同くゆり引に引て次の声同しくゆり引に少し引て廻す所のすみにて少し上へかりて下へ引下る也少し上へつき上て音を取直して引下る時は乙なれとも初重の律よりは高き律に引下る也病と云はすみにて少しかりたる所にて声の吟ひぞるもの也其ひぞりたるなりに引下るを病と云或は其所にて心たゆむが故に律下りすぎて引下すをも病と云是を改めすして天なりに常になりたるを癖とは云也みな心おこたり気のひつはりなき所より生する事と心得へし

補注③ 四ゆりは三重はかりに有此次にいつとてもゆりすへの節有先一のゆりははしめより出して声短かく二と三は声長く真中にて一ゆりゆりて首尾とくとゆる也四のゆりは声の出る所二三のゆりに同しく中のゆり短かくしてすぐに下のゆりすへの節にうつると心得へし此声にも病あり一つ〳〵のゆりの終しりさがりにめるを嫌ふ其体甚つたなし真中のゆりより声かるゆへに本の三重もちまへの調子に戻る所にて少し終がめるなり真中にて一旦上りて又本へもとるゆへにゆりとは言也然るに大きに下りては本意をうしなふ神楽なとのゆりは始声を出す時に大きにめりて乙より出し真中

より申へゆり上れとも尻を大きにめらすと云事は無終のめると云は気の張うすき所より出る事なり

補注④　甲にてゆるは三重ばかり乙にてゆるを中陶と云一のゆり短かく二三のゆり首尾得とゆること四陶の通り三めをとくとゆりて次にふりする〻の節有てゆり下けの大廻しにて終る也ゆりは下とはくり上と表裏の節なり上へあくるをくり上と云下へさくるをゆり下と云乙にてゆるは初重、又は中音の中の撥の所にあり乙にては次にゆりする〻の節有て語おさむるなり

補注⑤　引すてとは只一字ばかり長く引て置を云是もゆり引に引て首尾めりかりなきやうにするなり

補注⑥　操上は三段にゆり上るを云其終を廻して引下るなりはし今時大廻ト云ハ誤ナリ　め二つは同しやうにゆりて三つめを甲へゆり上て引下る所は中音のもちまへより高く大廻しの節の律に引下るを云此のくり上にては調子も違はず声もひぞらす餘り病は生せぬ也いかなれは声高くはり上る節ゆへに声にちからひつはり有て引下る所律もひくからず故に語よきなり大廻しの調子に引下ると吟味した人もなくてひとり其所より外下らぬ極たる声なり中ぐり上の節は声が中なるゆへにちから一盃にはらざる所より気もたるみ力も入ぬ故とこゝの調子に引下るやう爰に於て調子も吟味せされはつき上たる所にて声かひぞり吟かはりやすき也そこにて力を入て音を取直（トリナホ）すに及ばす其なりに引下る故に法に違ふ様にはなる事なり拾にも此くり上の節ありいかにも強りつよくいくつも小ゆりにゆりて終りを甲へくり上るなり和らかなるくり上は三段にしづかにくり上る拾甲音はいくつもこまかにつよくつよくゆりてくり上る也

補注⑦　大廻し　中音三重初重拾みな有中音にても三重初重にて今時小廻ト云ハ誤ナリ　も其もちまへの地調子（ジヂヤウシ）よりは一段浮て語るいつれも声ろくに引廻す所も律の違はぬ様に同調子に引廻すと心得へし拾にても地よりはかると合点すへし此節はかりはなれて有事はなし次に小廻しと云節必有と知へし次の小廻しにて三重中音初重ともにもちまへの地調子へ戻ると知へし

補注⑧　小廻し　此節短くして甚苦労の入節と心得へしくり上の今時入廻ト云ハ誤ナリ　節の次大廻しの次に必あり右二つの節を受て声を取直していかにも和らかに十分上へ高くつき入て三重にても中音初重にても其もちまへの調子へ引戻す事也夫故其次の文言調子も違はぬ事也引戻し少にてもかる時は此節の本道を失ふ此節つき入事甚難しいかんとなれは都て入声の時有は其所より催して浮てかゝる故に入やすし此節はくり上の引下も大廻しの引廻しも次の入ほとには声うかす此小廻しの場所にてなりて声を取なほして改めて入ねはならぬ故に此節には人によりてさま〳〵の病癖（クセ）有事也多口（オホクチ）さきにて入（イル）まねをしてすまして置人もあり随分和らかにうつくしく語

へき節なるにすさましき声を出してゑいやおふと入人も有たま〳〵入ごとは入たれ共戻り場を失ふて引戻し大きにかるのも有小廻しではなくてかさ高に大きういふ人も有すぎたるは及はざるが如しとはか様の事をや申へき

補注⑨　半廻しとはくり上の次に有節にて其引下の調子を受てちいさく少し跡をかりて中にて其もちまへの調子に引戻し置かろき節なり

補注⑩　入廻しとは小廻しに似て引戻し浮を云小廻とは各別語やすき節也入廻しの前は極て浮てかかる也入よき様に前より催してゆく故に入事甚やすく戻す所も持まへの調子より浮ておく也浮て置と云は此次に必ず甲へはり上節なれは也彼小廻しの節引戻す所浮時は此節と一つになるなり

補注⑪　あて廻しは半廻しに似て半廻しよりは声に力を入て律も少しかりて一あてあてゝ引戻しもかると知へし声をかるはかりにて入ぬ様にする也角にてつき込をあてると云引戻しうくと云は此節の次極て甲へはり上る所に有故也うくと云も次をはり上んため催す事なり

補注⑫　本廻し　一名折ルとも云声直に出て引下をとくと乙へおろすを云

補注⑬　すて廻しとは本廻しに似て本廻しは一旦乙へ引下て次の字にて又上て持まへの律とする也此節は次の字を引下ししなにすてて半分云をすて廻しと言ふ

補注⑭　すくひとは上々と二字上のつゝいたる所に用る節也持まへより声をからして声のあと上りにすくひ出す也文字によりてすくひ廻しとてあて廻しの声のかりたるものにてあとをすてるを云是は文字によりてあてゝすくふ節出来る也大納言の大の字なとすくひ廻しにも語ることなり

補注⑮　引するゑ　一名ゆりするゑとも云二つゆりすへの略也中音の中のばちなどに三ゆりの次に有歌の節に有初重の終に有是等は皆上を長くゆりて下をすへる也色音の終りに有は二つゆりすへの略也此外はみなつきすへに語りて上を長くゆるを嫌ふ

補注⑯　つきすへはゆりすへの略也中音にも拾にもあり初重には多あり上を随分短くふりて下をすへる上の長きを大に嫌ふ

補注⑰　ことはりは一字上の所に用ゆ持まへの地調子より少し浮を云乙の所に有乙にて少しうく也此次の字極てあたると心得へし

補注⑱　乙の所に有は甲へあげず乙なりにはるを云二字上の処に用ゆ

補注⑲　うくとは格別調子を改めす持まへより一段うくをいふ三重を初重に一字浮あれは其次の字あたると知へし中音に一字うき有は其次の字いろおとしになるなり中音にてうきの次あたるは音律

口説の違ふたると云ものにてうきの律にあらずうは調子なる人此のうきの次が多はあたる也乙にてうけばことはりと云て苦しからね共にてはことはりといひ初重にてはうきと云は口説と初重と声白(ゾク)が違ふ故也

補注⑳　此うくと云は入節の前張節の前にもよほしてういてかゝる時に用る節也

補注㉑　はるとは一段調子を其持まへより上る所に用其所々のもちまへの調子を考てはるへし

補注㉒　あたるとは上の節並の声なりに自然と声ひぞりてあたると心得へしすらりと声ろくに行ずひらりと声のひらめくを云アテと云は態とつきあてるを云あたるとは自然にあたるを云

補注㉓　入とは甲へ高くつき上る事にて只かんへ上るばかりには非す声づかひ和らかにして声裏へまはるにてはなし裏へのぞむ心ありと心得へししほり共しほるとも入とも云只かんへ上るばかりにては味なし其意味をとくと考知へし

補注㉔　中下ケとは多は入節の次にあり譬は二字上の文字の上の字を入ときは次の字を中へ下て其次をとくと乙へおとす也一字上の字を入ときは其次すぐに乙へおとすと知へし

補注㉕　ふると云は声真直ならす一ふりふる事也ゆると云へは長くふるといへは短かしと心得へしゆりは中にて上へゆり上る也ふると云へは中より乙へふり下る也其持まへの調子よりは乙へめらす所に用と知へし

補注㉖　ふり下ケとは甲より乙へおとすにすらりとらくにおちず甲より乙へうけ取文字をふり受取に請取を云

補注㉗　中廻しに二通り有中くり上共云中音に有は中音の持まへの律にて二ゆりゆりて三めを少し上へつき上て中音の律より下る乙へおとして初重の律へ引下ケて次の字にて中音の律へなをす也折声の中くり上は折声の二段めに有其二段の律にて二ゆりゆつて少し上へつき上て初重の律よりは高く中乙へ引下る也引下る時つき上たる音をとり直して気をひつはりて中乙へ引下る也此節に又病生しやすき也中にくり上ゆへにつき上る所もさして苦労ならず声はらざるゆへに気もはらす力たゆむへにつき上たる所にて声の吟ひぞりて正しからず其吟かはりたるなりに引下るゆへに節の律違ふ事此病人々に多き事なり能々考知へし

補注㉘　おとしとは折音にばかり有て外に無節(ナキフシ)也二段めの律の所に有思ひがけなくおつるをよしとす前の字より催しておとすを嫌ふ催すとはおとさんと思ふ心にて浮てかるを云也波多野流にては是を大きに嫌ふ中野検校毎度此事を論(ロン)ぜられたり前田流にては前の一字を長く引て至極催しておとす也是波多野流との違なりおとしやうは少し声ひぞり心におとせとも全くひぞるにも非すひぞると

ひぞらざるとの間なり

補注㉙㉚㉛㉜　三字上中四字上中五字上中みな同意なり此節は口説にありロ説の持まへは乙にして上の所は甲也中音の律まて上るを云也中とは上下の間にて節の形しり下がりに語ると心得へし上中にても上々中にても律をおとさず上の律にてしりさがりにすれは自然と律も尻さがりに一段下りて中の所に至る也諷なとにていろおとしと云類也律を下げす節をしりさがりに云をいろおちと云

（注）

① 館山漸之進『平家音楽史』

② 今日定説として言われている波多野流検校の系譜は、注①書に引かれる藤村性禅の説であるが、それによると次のとおりである。

波多野孝一――岸部検校――岸浪検校――権田検校――寺内検校――奥村検校――藤村検校

しかし、解説文中に触れたように、波多野孝一の没年の慶安四年（一六一五）という年から考えて、岸部・岸浪検校の活躍時期である十八世紀末から十九世紀初頭までには相当の年の隔りがある。今後、『平家音楽史』を含めて、基礎的な資料の再検討が必要であると考えられる。

③ 古典文庫第一〇九冊『追増平語偶談』

④ 同③参照。

⑤ その他「竹葬老」など。

⑥ 『平家音楽史』では、この部分を他二箇所で引用しているが年号を「寛永」と記している。これは十七世紀初頭のものであり、明らかにあやまりであるが、記事中の「桜町上皇」という呼称からすれば「寛延」であるかも知れない。

⑦ ただし、館山氏は、中野順一を前田流の人に加える。

⑧ 同①の荻野検校知一の箇所に、次のようにある。

平家正節首本日、河瀬死後、秦野平曲、失其傳、

そして、荻野検校が「秦野之業」を再び明らかにし、石塚検校に伝えたという。この点については、冨倉徳次郎氏も『平家物語研究』で述べておられる。また、尾崎家蔵『平家正節』の序には、

当是之時一有二河瀬検校一傳二秦野氏平曲一又従学（中略）自二河瀬没一而後秦野氏之傳絶復継者荻野氏績為レ多而援二之一石塚検校一

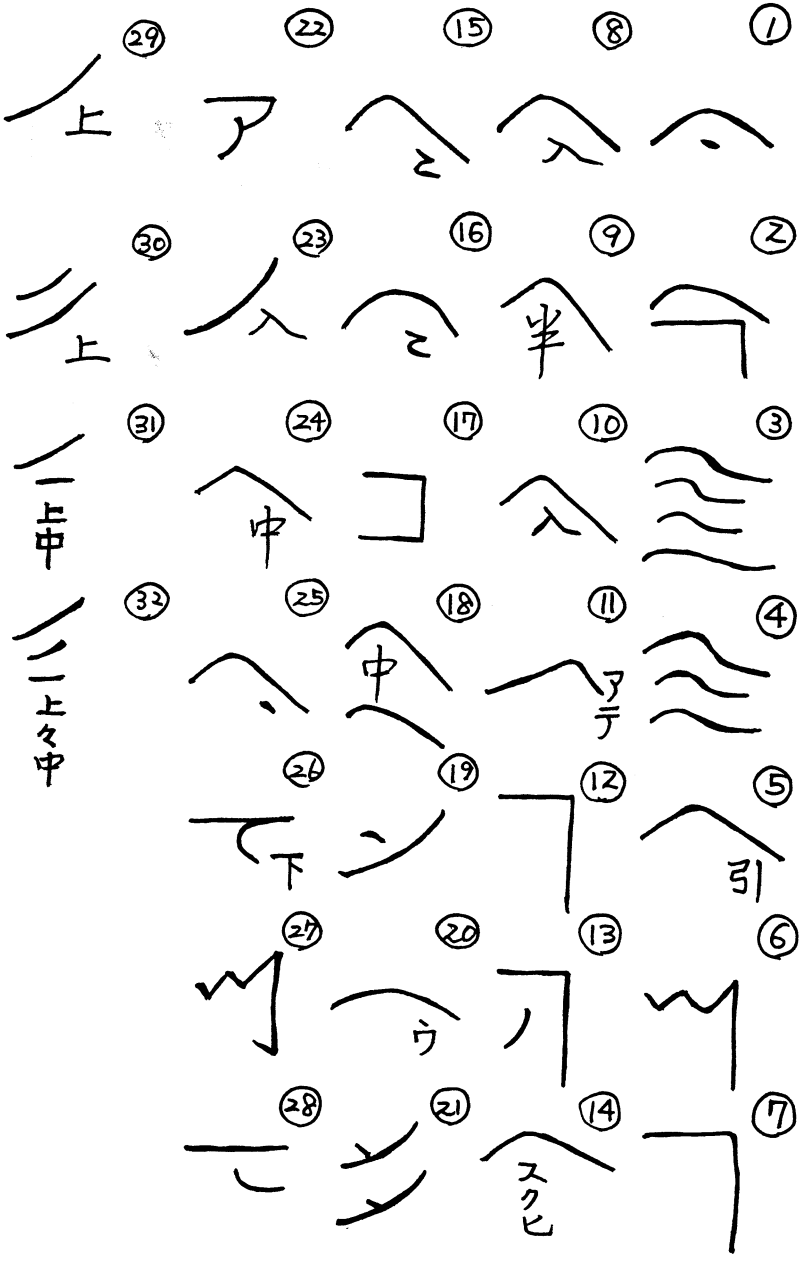
とある。

⑨ 『三代関』によれば、河瀬検校の権成は、享保十六年（一七三一）である。二人の活躍時期を推測する一つの目やすになるであろう。

付記

奥村家の当道関係文書の調査は、現在調査をほぼ完了し、今後報告する予定である。奥村家の調査をともにさせていただいている前田美稲子先生には多くの御助言、御指導をいただいた。また奥村家を紹介していただき、常に励ましのお言葉と御助言をいただいている山下宏明先生、草稿をていねいに検討して下さり御指導を賜わった大西善明先生、そして、快く所蔵の文書の調査を御許可下さった奥村俊郎氏御夫妻には、心からの感謝をここに記しておきたい。また、本書についてのみならず、当道座の研究、平家物語論への論及等、残された課題は山積みにされている。今後、改めて稿を重ね、平家物語研究に邁進し、恩師故里井陸郎先生の御学恩に報いるつもりである。

補注


①
②
③
④
⑤
引
⑥
⑦
⑧
⑨
半
⑩
⑪
アテ
⑫
⑬
⑭
スクヒ
⑮
⑯
⑰
⑱
中
⑲
⑳
ウ
㉑
㉒
㉓
㉔
中
㉕
㉖
下
㉗
㉘
㉙
上
㉚
上
㉛
上中
㉜
上々中